

現代青年における時間的展望の揺らぎ

——選抜システムと生殖モラトリアムの観点から——

高橋征仁

1 はじめに——ポスト青年期の出現と時間的展望の揺らぎ——

近年、学校教育終了後の青年のあり方について、フリーターやNEET、ひきこもりなどの就労をめぐる問題と、未婚化や晩婚化などの家族形成をめぐる問題とが、それぞれ大きな社会問題としてクローズアップされるようになってきた。これら2つの社会問題は、労働市場や家族関係の変化に伴う日本社会の構造的な問題という側面ばかりでなく、個々のライフコースにおける青年期から成人期への移行問題としての側面をあわせもっている。宮本みち子によれば、こうした移行問題は、1980年代から先進諸国において顕在化するとともに、徐々に長期化してきた（宮本 2005：25-26）。そしてその結果、「労働市場へのコミットメントを強めながらも、教育や訓練、余暇、離転職、パートナーシップなど、移行期の試行錯誤を展開する時期」として、「ポスト青年期」が形成されてきた（宮本 2005：38）。

他方、このようなポスト青年期をめぐる問題に関して、日本国内では、若年労働力の確保や少子化問題など、経済的基盤の中長期的衰退を危惧する観点から、国や自治体レベルで、本格的な支援が開始されようとしている。たしかに、様々な就労支援や経済的支援を通じて、青年たちを経済的自立から結婚・出産へと方向付けることは、個人にとっても社会にとっても非常に重要なことであろう。しかし同時に、就職することや結婚すること自体は、必ずしもこの問題の解決を意味しない。ポスト青年期においては、就職や結婚だけが問題になっているのではなく、「大人になること」の意味が問い返されたり、そのあり方が見失われたりしているからである。

かつてフロイト (S. Freud) は、「大人」の要件として「働くことと愛すること」の2つの能力を挙げた (Hale 1980: 29)。こんにちの青年たちは、まさにこの2つの営為の意味をめぐる危機に直面しているとみることができる。言い換えるなら、これまで青年たちがスムーズに大人になることができたのは、新卒者一括採用や性別役割分業、終身雇用といった制度的な枠組みによるところが少なくなかった。しかも、それだけではなく、就職や離郷、結婚といったライフイベントが、それぞれ年齢規範を伴った時間軸上の楔として、個々のライフコース上に打ち込まれていた。したがって、個々の選択において不安や躊躇はあったにせよ、そうした時間の楔を利用しながら、大人への階段を登ることができたのである。翻って、ポスト青年期における年齢規範の揺らぎは、個々のライフコースに自由化や多様化をもたらすと同時に、延長されたモラトリアムからの離脱をよりいっそう困難にしているようにも思われる。しかも、そうした時間の楔が朽ちてしまうことは、

おそらく元に戻すことのできない不可逆的な歴史的変化であると考えられる。

本稿で取り上げる「時間的展望」(time perspective)とは、いわゆる「みとおし」のことであり、「個人の現在の事態や行動を過去や未来の事象と関連づけたり、意味づけたりする意識的な働き」を指している(白井 2002: 1)。これまでは、主として青年期を対象に、時間的展望における揺らぎが取り上げられ、発達心理学的なアプローチによる研究が進められてきた(cf. Erikson 1968)。しかし、就労やカップリングをめぐる社会問題からも明らかのように、こんにち、この時間的展望の揺らぎは、もはや青年期に限定されたものではなく、ポスト青年期においても継続してみられるようになっている。時間的展望の揺らぎが拡大・長期化することによって、ポスト青年期が構造化されてきたとみることもできるし、逆にポスト青年期の構造化を通じて、時間的展望の揺らぎが加速してきたと捉えることもできるだろう。いずれにせよ、こうした大人への移行問題やポスト青年期の出現をめぐって、あらためて現代社会における時間的展望の特質やその形成メカニズムのあり方が問われている。

そうしたなかで、宮台真司は、アニメや音楽、宗教、性風俗などのサブカルチャーの考察を通じて、いち早く、現代青年の時間的展望にみられる質的变化を指摘していた。宮台によると、1980年代以降、女子には「終わらない日常」、男子には「核戦争後の共同性」という終末観が典型的にみられるようになってきたという(宮台 1998: 88)。この彼の「終わりなき日常」論は、残念なことに、時間的展望論として大きく取り上げられることはなかった。しかし、サブカルチャーにおける2つの終末観の分析を通じて、彼は、現代青年における時間的<展望>そのものの喪失と、終末観の非対称的なジェンダー化という時間感覚の変化を指摘していた。しかも、現代青年においては、進歩主義的な時間的展望も、その双生児ともいべきロマン主義的な時間的展望も、ともに失効している点を強調していた。これらの点において、彼の「終わりなき日常」論は、これまでの時間的展望論を大きく刷新する理論装置として期待できる。

そこで本稿では、この「終わりなき日常」論を、これまでの時間的展望に関する研究の文脈において位置づけ直すとともに、「日本的選抜システム」と「生殖モラトリアム」という観点から、その再構築を試みていくことにしたい。

2 近代社会におけるモラトリアムの形成と展開

近代社会における時間観念は、計量可能性と不可逆性を備えた「直線的な時間」(見田 1996: 5)として、しばしば定式化されている。しかもそれは、平坦な直線ではなく、一定の蓄積と価値的上昇を伴った「無限に上昇する時間」(三宅 1996: 124)として把握されていることが少なくない。こうした進歩主義的な時間観念は、18世紀の啓蒙思想によって生み出されたものであると同時に、経済成長や技術革新、あるいは身体的成長などのリアリティに支えられながら個々人のライフコースにおいて再生産されてきたと考えられる。

ただし、ここで注意しなければならないのは、機械論的な時間観念にせよ進歩主義的な時間観念にせよ、これら近代的な時間観念において想定されている直線的な連続性は、反省的に捉え返されたいわば「擬制」であるという点である。すなわち、これらの時間観念は、過去から現在に至る時間の素朴な存続や反復としての未来を含意するものではない。過去と未来との間にある種の断絶や非対称性があるからこそ、その両者を架橋し、意味づける枠組みとして、直線的な連続性が想定され、1つの時間的展望として構成されているのである。

近代社会における青年期は、このような近代的時間における直線的な連続性が「擬制」であることを端的に示している。というのも、「青年期」の概念自体、18世紀半ばルソー（J. J. Rousseau）によって、「第2の誕生」として発見されたものにほかならないからである。それは、教育や愛情の対象として「子ども」が発見され、近代家族へと囲い込まれていった結果、「大人」への移行期間として形成されてきたのである。そして、近代国家が新しいエリート養成を行うために高等教育制度を整備してくる中で構造化されてきた。したがって、こうした青年期の形成段階においては、「子ども」と「大人」の間の役割の不連続性だけでなく、親子間の地位や体験、価値観の非相続という意味での断絶も当時から存在したのである。ただし、そうした二重の意味での断絶は、当時のエリート候補の青年たちからすれば、社会的な上昇移動のチャンスであり、自我形成の問題として主題化されるものではなかった。すなわち、時間的展望の分岐点は、栄光か挫折か、あるいはそうした機会に挑むことすらできない不遇か、という点にあったと考えられる（竹内 1991、参照）。

これに対して、エリクソン（E. H. Erikson）が、自我アイデンティティの形成過程における役割実験の場として「青年期」を再発見したのは、1950年のことであった。そしてその後、高等教育が急速に大衆化してゆく過程において、「青年期」は、エリクソンのいう「心理—社会的モラトリアム」としての性格を強めていくことになった。エリクソンによれば、この青年期のモラトリアムにおいては、これまで習得してきた様々な役割や技能が再検討され、新しい時代の理想像へと架橋していくための役割実験が行われるという（Erikson 1968: 128）。すなわち、青年期においては、過去に行われてきた同一視や社会的期待の矛盾や非合理性が自覚的に捉え返されると同時に、新しい未来像や社会像、あるいは自己像との統合が試みられ、時間的展望が編み直されていくというのである。そうした青年期における時間的展望の揺らぎと回復の過程に対する関心は、その後の青年心理学や時間的展望論に大きな影響を与えていくことになった（都筑 1999、参照）。

他方、コールバーグ（L. Kohlberg）らは、1960年代の対抗文化に関する経験的研究を通じて、青年期の時間的展望の研究に2つの重要な知見を付け加えた。1つには、青年期における自我や時間的展望の揺らぎが、道徳的発達における相対主義の出現と一定の対応関係にあるということである。すなわち、認知的能力の発達を背景に、青年期には、既存の社会規範や社会的価値、慣習的秩序などが相対化され、その妥当性が失効することで、

自我や時間的展望に揺らぎが発生することが明らかにされた (Kohlberg 1984)。

もう一つの重要な知見は、青年文化が「対抗文化」という形で、商品化され、パターン化されてくることによって、青年期における相対主義的な懐疑が、より早期化するとともに、長期化しつつあるという指摘である。彼らは次のように述べている (Kohlberg & Gilligan 1971: 1080-1081)。

慣習に対する相対主義的拒絶は、かつて、青年たちが自らの経験を反省的に捉え返すなかで、一人一人の手で自発的に展開されてきた。しかしいまや、この拒絶は「対抗文化」と呼ばれる文化産業として、大量生産されている。(中略) こんにち特徴的なのは、青年たちが自覚的に懐疑し始める以前に、彼らになかば解答を与えてしまうような懐疑的な文化が形成されたことである。

コールバーグらによれば、大人社会に対する自発的な懐疑や拒絶は、メタレベルでみれば、それ自体が〈未来の〉自己や社会に対する信仰の表明であったという。コールバーグらは、懐疑主義的な文化が先進諸国に浸透してゆくなかで、そうしたメタレベルでの〈未来〉志向が、大きく揺らぎ始めたことを指摘していた。

また日本においても、栗原彬が、モラトリアムの長期化やその閉塞状況を指摘していた。彼によれば、モラトリアムからの移行パターンは、大きく3通りに分類できるという (栗原 1981: 134-137)。1つは、モラトリアムを一挙に捨てて、組織やイデオロギーに過剰同一視することで、擬似的にアイデンティティを形成する方法である。2つめは、就職延期や留年、留学などによって、引き延ばされたモラトリアムの中に留まるという方法である。しかし、たいていの場合、モラトリアムの延長には限度がある。そこで第3の方法として、社会的モラトリアムと心理的モラトリアムとを分離し、モラトリアムを内面化する方法がとられる。すなわち、社会的モラトリアムの終了後、社会的役割や責任については一定程度引き受けながらも、心理的にはモラトリアムを継続し、「内面化されたユートピア」を保持していくというのである。したがって、その場合、一定の社会的地位や職業によって「管理された時間」と、まだ特定の存在としての自己定義を保留した「未決の時間」とが、2重に生きられることになる。

このような、コールバーグや栗原らにおけるモラトリアム論の展開から、1970年代の青年期の時間的展望における質的变化を読み取ることができる。エリクソンのアイデンティティ論は、人生における葛藤や不連続を強調しつつも、そうした問題の克服過程として人生を展望している点で、進歩主義的な色合いの濃いものであった。それに対して、コールバーグや栗原らの議論に登場する青年たちは、〈未来〉や〈成熟〉それ自体を懐疑し、ときには拒絶する。そして、社会的コミットメントを回避する一方で、具体的な他者との親密性や自我の内面性を強調し、価値づけている。これらの点からすれば、青年の時間的展望は、1970年代に、よりロマン主義的な傾向を強めていったと特徴づけられる。

こうしたロマン主義的な時間的展望は、G.H.ミードによれば、もともとフランス革命後

の政治的挫折の産物であり、再発見された過去からの自我を捉え返そうとする点を特徴としている (Mead 1936: 61)。

ロマン主義とは、第一義的な事実としての自我の存在に立ち返ろうとする運動である。そこでは、自我の存在こそが、価値をもたらす基準となるのである。したがって、ロマン主義の時代に解明されたのは、たんなる過去ではない。そうではなくて、自我に立ち返るための観点としての過去なのである。(中略) ロマン主義の起源を構成しているのは、このように自己意識的に過去を設定し直そうとする営みである。

こうしたミードの見解を敷衍するならば、1970年代のロマン主義的な時間的展望は、1960年代後半に噴出した青年現象の挫折を経て広まっていったとみることができるだろう。

3 輝かない未来——「終わりなき日常」論における時間感覚——

ここまでみてきたような青年論は、1960年代から1970年代にかけての青年現象を背景としながら、主として発達論的なアプローチによって展開されてきた。そこにおける規範的な関心は、慣習的秩序や素朴な時間的展望に対する自明性が払拭され、相対化されたのちに、青年はどのようにして、社会的なコミットメントを回復したり、時間的展望を編み直したりするのだろうか、というものであった。しかしながら、経験的事実として見出されたのは、モラトリアムの延長や内面化であり、自我や時間的展望における揺らぎの慣習化、長期化という事態であった。

他方、宮台による「終わりなき日常」論は、1980年代のアニメや音楽、宗教、性風俗などサブカルチャー研究の文脈において構築されてきた。それは、時間的<展望>そのものを喪失した青年たちの「終末観」を取り上げ、それがジェンダーによって非対称的に構成されていることを主題化した点において、それまでの発達論的な時間的展望論と大きく異なるものであった。奇妙にも、発達心理学的なアプローチにおいては、モラトリアムや時間的展望にみられるジェンダー化という素朴な経験的事実が、重要な事柄として取り上げられてこなかったのである。

宮台によると、1980年代前半に、まず女子を中心とした「終わらない日常」という終末観が登場し、次に1980年代後半になると、男子を中心とした「核戦争後の共同性」という終末観が登場してきたという (宮台 1998: 88-89)。このうち前者は、「輝かしい進歩」も「おぞましき破滅」も否定して、学校的な日常のなかで永遠に戯れ続けるしかないとする時間感覚である。そうした永遠の日常は、それ自体がユートピアであり、ディストピアでもあるという。他方、後者は、核戦争後の廃墟の動乱のなかで、あらためて団結や共同性の価値を再確認するというフィクションに基づく時間感覚である。男子たちは、核戦争などの「非日常的な外部」を未来に投影することで、身体感覚や方向感覚を回復しようと試みていたというのである。

このような新しい時間感覚は、未来のユートピアや進歩に対する懐疑的・否定的態度と

いう点において、1970年代の時間的展望と共通しているようにも思われる。しかしながら、宮台は「終わらない日常」という感覚の特異性を徹底して強調している。なぜなら、1980年代の「終わらない日常」という時間感覚においては、「輝かしき未来」に対する断念の記憶や、それに対する悲哀が、そもそも付随していないからである(宮台 1998:140-141)。この点において、「終わらない日常」は、1970年代のロマン主義的な時間的展望と大きく異なっている。そして、そうした断念の記憶を持たない者は、「終わらない日常」の外部を夢想しなくても、適当に生きられるのに対し、断念の記憶を有する者は、「終わらない日常」の外部を夢想したり、それを現代青年に投射したりせずには生きられないのだという。

したがって、こうした「終わらない日常」という女子の時間感覚は、現在を価値付けるための外的な基準をもたないという点において、進歩主義的な時間的展望とも、ロマン主義的な時間的展望とも一線を画すものとなっている。言い換えるなら、進歩主義的な時間的展望とロマン主義的な時間的展望は、その起点を未来の理想像に置くのか、あるいは回顧的な過去に置くのかという点が対称的であるだけで、現在の意味を外部から調達しようとする点において、両者は共通している。さらにいえば、「核戦争後の共同性」という男子の時間感覚も、ディストピアとしての未来から現在の意味を調達しようとする点で共通しており、進歩主義の裏返しとも、倒立したロマン主義ともみることができる。そして、このような「核戦争後の共同性」と「終わらない日常」との対比は、なんとしてでも大きな時間の物語にぶら下がらないとうまく人生の意味を調達できない男子と、日常を詳細に観察することで、その内部的から意味を調達できる女子との現実適応能力の格差として捉えられている。

このような「終わりなき日常」論は、すでに発表から10年以上経ているが、現在もおお、その洞察は十分に通用すると考えられる。しかし、だからこそ本稿では、次の2つの点から、この「終わりなき日常」論に対する問題を提起し、試験的にその再構築を図ることにしたい。まずその1つは、「終わりなき日常」や「核戦争後の共同性」という時間感覚の形成メカニズムに関する問題である。宮台の議論においては、主としてサブカルチャーを舞台に、新しい時間感覚に関する歴史的な培養過程が記述されている。もちろん彼の指摘するように、時代に鋭敏な一部の漫画家やミュージシャンたちが、新しい時間的プロットを先駆的に提示してきたのかもしれない。しかし、それが青年たちに浸透し、共有されていくためには、何らかの構造的要因が媒介していると考えられる。そこで、次章においては、日本社会における選抜システムという観点から、時間的展望の形成と変容を捉える理論的枠組みを提起することにしたい。

もう1つの問題は、「終わらない日常」という時間感覚の構成にかかわる問題である。宮台の議論において、それは、外的ユートピアの不在や永遠の学校的日常から特徴付けられていた。しかし、この時間感覚の最大の特徴は、1970年代以前にはあったはずの、結婚して「母親になる時間」がどこにも見当たらない点にあるのではないだろうか？だとすれ

ば、そうした時間が、いわば<目隠し>されて別次元において運行されているということこそが、この時間感覚の決定的な特徴であると考えられる。この点に関しては、最終章において、「生殖モラトリアム」という観点から考察を試みることにしたい。

4 選抜システムにおける U 字型の時間——冷却装置としての学校教育

ここまで、青年期における時間的展望が、進歩主義的時間からロマン主義的時間を経て、「終わらない日常」や「核戦争後の共同性」という感覚へと変化したのを見てきた。しかしながら、発達論的な青年論においても、サブカルチャー論においても、時間的展望の形成や変容のメカニズムに関する議論は、十分に展開されているとは言い難い。そのため、現代青年にみられる時間的展望をめぐる問題は、たんなる景気の動向や文化的潮流に還元されたり、個々の青年の意欲の問題へと解消されたりしてしまうことも少なくない。

これに対して本稿では、近代社会における時間的展望の母胎として、選抜システムとしての学校教育に着目して考察を進めていくことにしたい。近代社会は、通過儀礼など伝統的な時間の楔に代わって、学校における進学・進級や官僚制組織における昇進・昇格など、選抜機会として構造化された人為的な楔を設定してきた。人々は、この選抜システムを媒介にして、将来展望を予期したり、現在の社会的地位を過去の結果として引き受けたりしている。しかも、この学校教育の場面においては、モノクロニカルに編成された時間的秩序のなかで、近代的なパンクチュアリティが身体化されていく。こんにち、ポスト青年期に存在するライフコースの断層は、この選抜システムとしての学校教育が構成する時間と、職業生活や家庭生活の時間との不連続として理解できる。

この選抜システムとしての学校教育は、ともすれば、競争による上昇移動というアスピレーションを増幅し、進歩主義的な時間的展望を浸透させたと考えられるかもしれない。しかし、それは一面的な見方にすぎない。クラーク (B. Clark) や竹内洋の展開する「過熱」と「冷却」をめぐる議論は、この点を理解する上で非常に有効である。彼らによると、巨大なエンジンに巨大なクーラーが必要であるように、近代社会の選抜システムにも巨大な「冷却」装置が必要になってくる (Clark 1960, 竹内 1991)。というのも、より多くの人々が選抜に参加し、熱心に競争をすればするほど、挫折や不満も大きくなり、選抜システム自体の存立さえ危うくなってしまふからである。そのため、ときには学校そのものが、その教育的理念とは裏腹に、「アスピレーションを冷却し、それぞれの分を知らせる機関」(竹内 1995 : 68) として機能してしまうことになる。

図 1 は、A 大学における学校外の勉強時間とアルバイト収入金額について、学年ごとの平均値を示したものである。ここからもわかるように、それぞれの学校教育機関において実際に「生きられる時間」は、入学と卒業との間にいわゆる「中だるみ」を有する U 字型もしくは J 字型の時間として編成されている。もしさらに細かくみるならば、この「中だるみ」の間にも、試験とイベントを契機とする緊張と弛緩の連続体として、学校の生活時

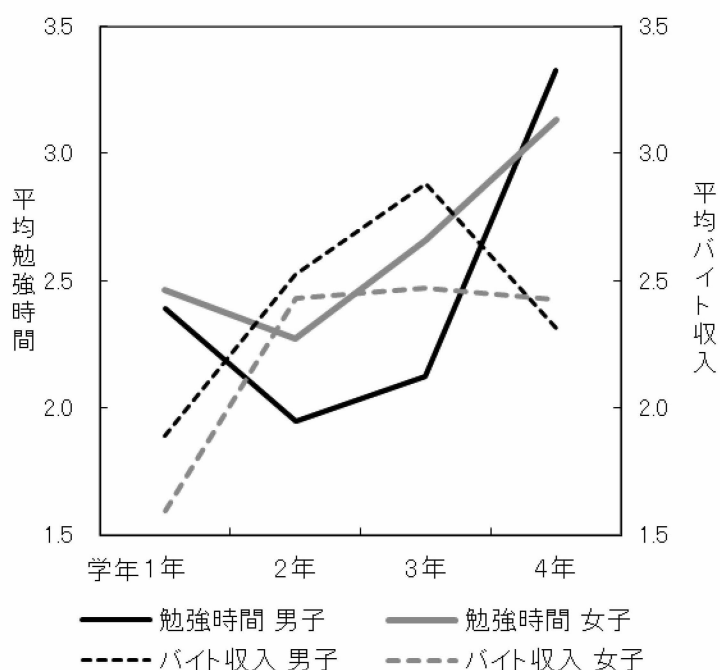


図1. 大学生の勉強時間とアルバイト収入

卒業時において最も高くなる現象がみられる。

他方、正規のカリキュラム外に費やされる「冷却」の時間は、図1のアルバイト収入金額からも推察できるように、勉強時間と反対の凸型の時間を構成している。ただし、ここで注意しなければならないのは、そうした「冷却」の作用や時間は、選抜システムにとっての対抗的要素ではなく、むしろ機能的に相補的な要素であるという点である。それは、入学時の過大なアスピレーションを冷却し、より具体的・現実的な選択へと組み替えることで、選抜システムの存続に貢献している。

こうした「加熱」と「冷却」のカップリングによって、それぞれU字もしくはJ字型の学校時間が構成されるとともに、それらの接合様式に関する予期として、青年期の時間的展望が形成されていると考えることができる。選抜システムは、その起動時において、選抜システムの外部にいる人々を動員するために、官吏登用や教員採用、兵役おける優遇措置など様々な可視的な外部報酬を設定してきた。したがって、そこでは、学校時間と卒業後の時間とを接合して、進歩主義的な時間的展望を形成することが可能であった。しかし、日本では、団塊世代以降、上層ホワイトカラーへの階層移動という外部報酬が縮小されてきた（佐藤 2000、参照）。高等教育の普及は、皮肉にも選抜システムの外的報酬を減少させるとともに、学校教育後の時間との接続を困難にしてきた。その結果、選抜システムにおける学校ランクやモラトリアムにおける「自分探し」という内的報酬が探求され、ロマン主義的な時間的展望が形成されていたと捉えることができる。

さらに現在では、雇用環境の変化により、学校教育の選抜システムと労働市場における

間は編成されているといえる。

これは何も特定の学校に限定された現象ではなく、日本の中等～高等教育機関に広く見出されるものである。というのも、日本の学校教育は、それぞれの学校内部で成員の動機付けを培養しているのではなく、進学や就職といった次のステップを先取りすることで動機付けを調達しているからである（竹内 1991）。そのため、勉強時間や教育アスピレーションは、入学時や

選抜システムとの間の齟齬が目立ち始めてきている。竹内によれば、日本の学校教育における選抜システムは、偏差値ランクにみられるような小刻みな層別競争移動と、1回の選抜ごとにその成果をご破算にして競争を再開する「リシャフリング型選抜規範」によって特徴づけられるという（竹内 1995：242-243）。学校教育における選抜システムが、こうした形式主義的な公平性や透明性によって特徴付けられるのに対して、労働市場における選抜システムは必ずしもそうではない。若年層の労働市場においては、様々な属性主義が導入されるだけでなく、どのような初職についたのかがその後のキャリア形成を通じて継続的に影響してしまう（石田 2005：53）。しかも、卒業時の採用状況や学校による斡旋といった偶発的な出来事までが、その後の移動において増幅効果を持つてしまう不透明なトーナメント型移動となっている。したがって、リシャフリングや敗者復活がないからこそ、初職の決定に慎重にならざるをえないが、同時に、決定の引き延ばしそれ自体は、選抜のマイナス要因となってしまうというジレンマが発生することになる。

こうした選抜システムの閉塞状況から考えると、「核戦争後の共同性」という男子の終末観には、既存の競争からの離脱願望と肯定的な自己像の維持欲求とが同時に反映されていると考えられる。「もう一度レースをやり直せば頑張るのに」という反事実的想定は、「今のままのレースをもう続けたくはない」というあきらめと、それにもかかわらず「もう一度頑張るはずの自分」という自己像の肯定を同時に表現するものとなっている。メリトクラティックな社会において本来矛盾するはずの競争からの離脱と肯定的な自己像とが、反事実的な想定の中で両立されているのである。

このようにみても、青年期やポスト青年期における時間的展望の変容は、学校教育における選抜システムの飽和と、その後に露呈されてきた労働市場における選抜システムとの不整合という観点から、一貫して説明できると考えられる。

5 おわりに——生殖モラトリアムとしての終わらない日常——

他方、女子を中心とした「終わらない日常」という終末観について、宮台は、結婚が輝きを失った 1970 年代後半にその起点を求めている。たしかに、恋愛メディアの自律化によって結婚が相対的に意味を失ったり、結婚を契機にした上昇移動の機会が減少したりすることで、女子の時間感覚に大きな変化が発生したということは容易に理解できる。しかしながら、なぜ未来に対する否定的な予期が、現在を微分するまなざしに転換されるのか、また、なぜ結婚という理想を喪失した後で、男子同様の選抜システムに準拠した時間的展望へと変化しなかったのか、という点については疑問が残る。1970 年代の女子が結婚幻想とキャリア幻想の間で宙吊りにされていたというのであれば、結婚という一方の選択肢の否定は、キャリアというもう一方の選択肢への傾斜を帰結するようにも思えるからである。

このような疑問に答えるためのモデルとして、本稿では「生殖モラトリアム」仮説を提示することにしたい。ここでいう「生殖モラトリアム」とは、女子にとって、青年期やポ

スト青年期におけるモラトリアムが、「妊娠—出産」を終点として遡及的に構成されていることを示す概念である。ただしこれは、女子にとってのモラトリアムが、母親になるための準備・練習期間としての性格を持つという意味ではない。そうではなくて、母親の時間というものが、現在のモラトリアムの時間からは想像もつかない完全な別次元で運行されており、いつかそれが到来することで、現在のモラトリアムは突然終止符を打たれると予期されているのである。

小田美由紀は、女子学生の喫煙行動についての調査を通じて、この「生殖モラトリアム」の概念を提起している（小田 2000）。彼女はまず、喫煙女性が、親や異性に喫煙習慣を隠している「隠れ喫煙」者と、親や異性の前でも喫煙習慣を隠さない「オープン喫煙」者に、大きく分けられることを発見した。そしてこの両者とも、「妊娠したら喫煙をやめなければならない」と考えている点では共通しているが、その時点に至るまでの対処様式が両者の間で全く異なっていることを指摘した。彼女によれば、「隠れ喫煙」者は、現在や結婚時にも喫煙を抑制すべきだと考える傾向がみられるのに対し、「オープン喫煙」者はむしろ、妊娠していない限り喫煙は自由だと考える傾向がみられたという。こうした「オープン喫煙」者の回答傾向には、現在の時間と母親の時間との断絶を読み取ることができるだけでなく、母親の時間との断絶それ自体が、現在のモラトリアムの自由を担保し、それを価値付けている関係をも読み取ることができる。すなわち、「学生だから喫煙できる」「喫煙できるから学生はいい」といったトートロジカルな意味調達は、母親の時間を限りなく外部化すると同時に、それに目隠しをすることによって可能となっていると考えられる。

このような「生殖モラトリアム」という観点からすれば、宮台のいう「終わらない日常」においても、実は「母親の時間」という外部が存在していることになる。しかし、この「母親の時間」は、学校的日常の延長線とは全く交点を持たない、いわば「ねじれの位置」において運行されていると感じられている。すなわち、いつかその時間が来るということは予感されていても、日常生活において、それが主題化されることはないのである。むしろ、現在をより自由に楽しむためには、この「母親の時間」を「目隠し」しておくことが暗黙の了解になっている。このように考えるならば、学校的日常が永遠化されることにも、また男子と同様の時間的展望へと変化していかないことにも、一応の説明がつくことになる。

高崎真規子は、少女たちのセックスの問題について調査をしていく中で、ここでみた「生殖モラトリアム」と同様の年齢感覚を取り上げている（高崎 2004：44）。そこでは、20歳の女子大生たちが、17歳と18歳の微妙な差異を大きく取り上げ、議論する一方で、30歳以降の自分の姿を全く想像できない様子が描かれている。

「でも、まだ一八歳はよかったけど、一九歳だな。一九になってからもずっと一八歳っていった」

「いや、私の中では一八、一九、二〇はいっしょ。十七歳までだよ」

「じゃあ、三十路とかどうなるのかな。あーやばいね。死ぬのかなそんとき（笑）」

こうした会話例からもわかるように、学校的な日常を微分しそれを楽しむという時間処理は、「母親の時間」に対する「目隠し」という時間処理と相補的な関係にあると考えられる。

考えてみれば、もとより学校的な選抜システムと、配偶者選択や家族形成のシステムとの間には、非常に大きな乖離が存在していた。学校教育と労働市場の選抜システムにおける相違と比べても、その違いは格段に大きい。むしろその両者を、良妻賢母教育という形で架橋しようとした近代主義的な企てのほうに無理があったとみてよいだろう。学校教育における選抜システムと異なり、配偶者選択においては、合理性や公平性が機能する余地がほとんどないからである。先に述べた初職の選択と同様、合理的に選択しようとする、制御できない要素が多すぎるために選択できなくなるというジレンマが存在している。

しかも問題はそれだけではない。「母親の時間」が「目隠し」されてしまう背景には、性やジェンダーのあり方について語ることが、教育現場における左右のイデオロギーの係争点になってきたという歴史的な経緯も存している。教室において性やジェンダーについて語ることは、いまや第2次世界大戦について語ることに、リスクの大きい振る舞いになってしまっている。さらにいえば、フルタイム主婦とパート主婦、専業主婦によって構成される三竦みの現実的關係の中で、「母親の時間」の価値を共同で見出し、他の時間と接続していくことは決して容易なことではない。

もちろん、現代社会において、自由なモラトリアムに終止符が打たれるのは、学校の卒業や就職でもないし、極端に言えば結婚でさえない。子どもという自分が身体を張って守り、育てなければならぬ存在を迎えたときに、ようやくモラトリアムは終了する。しかし、ここまでみてきたように、女子の時間的展望においては「母親の時間」を目隠しすることが現在を楽しむ条件となり、男子の時間的展望においては、そもそも「父親の時間」が存在していない。ポスト青年期にみられる移行問題の本質は、ここで述べてきたような学校教育という選抜システムの時間と「母親（父親）の時間」との接続問題にあると考えられる。しかも、様々な優遇制度も、それをめぐる合理的選択も、なかなかこの接続問題を解決できないのが実情である。

現代青年における時間的展望のあり方とその問題の所在をこのように考えるならば、近年増加しつつある「できちゃった結婚」という現象も、次のように理解できるかも知れない。すなわち、それまで生活していた学校時間の延長線上から、妊娠を契機に、ねじれの位置にある母親の時間へと一挙に移行しようとする企てではないかと考えることができる。地震のようにいつ起きるかわからない妊娠という「偶然の」出来事に身を任せることで、合理的には埋めることのできない結婚や離職、出産といった時間の溝を、青年たちは瞬時に飛び越えようとしているのかも知れない。

参考文献

- Clark, Burton, 1960, The 'Cooling-Out' Function in Higher Education, *American Journal of Sociology* 65: 569-576.
- Erikson, Erik E., 1968, *Identity: Youth and Crisis*, Norton.
- Hale, Nathan, 1980, Freud's Reflections on Work and Love, In Smelser, Neil J. and Erikson, Erik E., eds., *Work and Love in Adulthood*, Harvard University Press: 29-42.
- 石田浩, 2005, 「後期青年期と階層・労働市場」『教育社会学研究』76 : 41-57.
- Kohlberg, Lawrence, 1984, *Essays on Moral Development II: The Psychology of Moral Development*, Harper & Row.
- Kohlberg, Lawrence and Gilligan, Carol, 1971, The Adolescent as a Philosopher: The Discovery of the Self in a Post-Conventional World, *Daedalus* 100:1051-1086.
- 栗原彬, 1981, 『やさしさのゆくえ＝現代青年論』筑摩書房.
- Mead, George Herbert, 1936, *Movement of Thought in the Nineteenth Century*, University of Chicago Press.
- 見田宗介, 1996, 「序 時間と空間の社会学」井上俊ほか編『岩波講座現代社会学 6 時間と空間の社会学』岩波書店 : 1-14.
- 宮台真司, 1998, 『終わりなき日常を生きろ』ちくま文庫.
- 三宅正樹, 1996, 「時間の比較文明論」井上俊ほか編『岩波講座現代社会学 6 時間と空間の社会学』岩波書店 : 117-135.
- 宮本みち子, 2005, 「先進国における成人期への移行の実態」『教育社会学研究』76 : 25-39.
- 小田美由紀, 2000, 『女性の喫煙行動とジェンダー・アイデンティティ』2000年度山口大学人文学部卒業論文.
- 佐藤俊樹, 2000, 『不平等社会日本』中公新書.
- 白井利明, 2002, 『時間的展望の生涯発達心理学』勁草書房.
- 高崎真規子, 2004, 『少女たちはなぜHを急ぐのか』日本放送出版協会.
- 竹内洋, 1991, 『立志・苦学・出世』講談社現代新書.
- 竹内洋, 1995, 『日本のメリトクラシー』東京大学出版会.
- 都筑学, 1999, 『大学生の時間的展望—構造モデルの心理学的検討—』中央大学出版部.

所属 : 山口大学人文学部

E-mail アドレス : takahasi@yamaguchi-u.ac.jp